雀いろの空

和田芳恵

中央公論社

雀いろの空

©一九七八
検印廃止

価千二百円

著者　和田芳恵　発行者　高梨茂　昭和五十三年
四月二十日初版印刷　昭和五十三年四月三十日
初版発行　印刷所精興社　発行所東京都中央区
京橋二－八－七　中央公論社　振替二－三四番

雀いろの空　目次

落葉のように　七
月は東に　三一
日なたぼこ　五五
通勤電車の中で　七九
雀いろの空　九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

砂の音　一二五
巣箱　一五三
同じ屋根の下で　一七九

照　影（昭和四十四年五月撮影）　飯田隆夫
装　幀　岡鹿之助

和田芳惠
作品集

雀いろの空

落葉のように

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

線路ばたの日溜りに、薄(すすき)の大きな株が生い繁っていた。遠くの海鳴りを運んでくる風に、薄の穂は身をまかせ、なぶられるように揺れ動いていた。

「なにもかも、昔のままだ」

私は久し振りに生れ故郷へ戻ってきた男にありがちな型どおりの台詞を繰り返していた。

ぽっかりと白い雲を浮かせて澄みあがった青空に、どことなく秋の気配が感じられた。北国の、烈しくて短い夏は、じき終ろうとしていた。

私は北海道の内浦湾に面した国縫(くんぬい)村の小さな駅に降りると、線路脇のせまい野道を

伝わって墓地へむかった。墓地は村はずれの高台にあった。

私の生家が破産して、村を棄ててから半世紀あまりたっていた。小学校を終えようとした頃で、私は赤い頬をして、黒い髪を短く刈った、丈夫な子供であった。

長い年月のうちに親戚や縁者は、あらかた死んでしまい、若い人たちは、職を得て、憧れの町へ移り住むようになった。おさな友だちの顔と名が思いだしてもつながらない始末で、私は名ばかりの生れ故郷に帰った、ただの旅人であった。少なくなった頭の毛は白くなり、深い皺は顔の傷あとのようであった。

村との連絡が絶えたのは、都会慣れした私の代からで、ことに敗戦後の生活苦から、遠くまで気をくばる余裕もなくなっていた。

私が東京に住んでから、私の妻、父、母の順に死に、祖父母の代からの国縫の墓にはいった。

胸をわずらっていた妻は療養生活が長かったから、ふと思い出したように、死んだ

ら、国縫の土に埋めてくださいね、と私に頼んでいた。妻は従妹で、本家の娘だった。

本家も分家もいっしょの墓は、祖父母からの骨が、にぎやかに納まっているので、妻はさびしくないと思うらしかった。妻が死んだのは昭和十二年の早春であった。その頃、私は出版社に勤めて、月刊誌の編集をしていた。

私の両親に連れられた、小さな私の子供が埋骨のために国縫へ行った。私がいっしょに出掛けなかったのは、仕事のためだったが、むりをすれば、なんとかなるはずであった。

国縫には、まだ、小学校時代の私たちの友だちや、世話になった村人も多く、もう一度、小さな葬をして、悲しみあうことになるのを、私は心ひそかにおそれた。

まだ、勤人が私用で長い休暇をとるような気風でなかったから、編集がいそがしいといって、私は行かなかった。

いずれは、私も、この墓に眠ることになるだろうという考えもあった。

私には、一人の姉がいて、生涯、独身であった。

姉は同じ場所に、じっとしていることができない性格で、親類や知人のところを、ぐるぐる回って、なんとなく暮していた。

姉は看護婦と助産婦の資格があり、江別の製紙会社の付属病院の婦長を手はじめに、大きな病院で働いていたが、そのうち、派出婦会にはいり、月の生活費分だけ仕事をして、あとはきょうだいたちのところで休むというような生き方をしていた。

私は最初の妻が死んでから、再婚するまで、家を忘れたような、ぐうたらな暮しをおくっていた。姉は母親がわりの役で、満足らしい心づかいを見せた。

壮年になっていた私は、大森海岸の森ヶ崎にあった割烹旅館で、土地の踊のへたな芸者といっしょに寝た。胸の厚い妓をからかって泣かせた、遊び上手な仲間に対する肚(はら)いせで、この妓と泊ることになったが、歯止めのきかない、だらだら遊びを続けていた。

少ない貯金を使いはたすと、姉が遊びの金を出してくれたりした。

きょうだいたちは結婚して、姉が連れあいに気をつかったり、また、焼餅をやいた

りするようになっていた。
姉が行った先きでは、いつも、ごたごたが起き、そのあげく、別のきょうだいのところへ移った。
「権太さん、あなたの姉さんは、なにか仕掛けをして、きょうだいの家庭に、いざこざがおきるのをたのしんでいるのよ。もませて、仲なおりをさせ、それがおもしろいようなの。静かな暮しは退屈だなんていうんですもの、あなたも、気をつけてくださいね」
私が、いまの妻と暮すようになってから、兄嫁から、姉のことで、注意されたりした。
「ええ、わかっておりますよ、義姉さん」
私は調子のよい受け答えをしていたが、やはり、同じ血をわけた姉のことだから、私のつけた点があまかった。
姉は暴走族のオートバイに追突されて、大腿骨を折ってから、松葉杖を頼るように

なった。

いやになれば問題をおこし、それを訴える形で、きょうだいのところを歩きまわっていた姉は、からだが不自由になって、同じ場所にいなければならぬため欝病に取りつかれた。私のところから、大塚の病院に入院して、きょうだいが病気見舞で落ちあうようになると、次ぎから次ぎと姉の嘘がばれていった。

私の妻は、月に三度、決って、姉のところを訪ねていた。

「みんなで、いじめるのよ」

妻の耳へ口をつけるようにして、姉はひくい声で訴えたということであった。

病院が、いやになって、姉が嘘をいっていると思った。

「また、はじまったな」

私は苦笑して、妻の言葉を気にもとめなかったが、三日過ぎて、病院から姉が危篤という電話があった。遅い昼食がすんで、ぼんやりとテレビを見ていたときであった。

あわてて、私たちが身支度をして出掛けようとしていたとき、「いま、なくなりま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.